

縄文

と弥生

—時代と文化の転機を生きた人々—

神奈川県教育委員会

神奈川県立歴史博物館

綾瀬市教育委員会

ごあいさつ

縄文時代から弥生時代への移り変わりは、狩猟採集社会から稲作農耕社会へと変化を遂げる転機であり、歴史上の大きなターニングポイントであったといえます。

神奈川県域をはじめとした関東地方や中部高地では、縄文時代中期に極大化した遺跡数は、後期を迎えると減少に転じ、後期後葉以降から晩期にかけて激減します。

その背景として、世界的な気候の寒冷化により植生が変化したことで食料資源が枯渇し、狩猟採集社会が行き詰まり、その窮状を打破すべく稲作を取り入れることで、歴史的な転換がはかられたとされてきました。

しかし近年、停滞あるいは衰退と評価されてきた縄文時代後・晩期の社会観を見直す動きが出てきています。後・晩期社会が寒冷化を積極的に利用し、植物質食料の多角化を図り、気候の変動に適応したことがわかってきたためです。

このような視点から、変動する自然環境に適応した人々が縄文時代から弥生時代へと移り変わる時期をどのように暮らしたのかを探ることにします。

この展覧会を通して、郷土神奈川の歴史や埋蔵文化財への理解を深めていただければ幸いです。

令和元年 11 月

神奈川県教育委員会
神奈川県立歴史博物館
綾瀬市教育委員会

目 次

I. 縄文文化と弥生文化、それぞれの暮らし	01
II. 環状集落のその後 — 縄文時代後期の暮らし	02
III. 縄文時代晩期の暮らし	05
IV. 縄文と弥生の転機 — 縄文時代晩期後半	06
V. 縄文と弥生の転機 — 弥生時代前期後半	10
VI. 縄文と弥生の転機 — 弥生時代中期前半	18
VII. 縄文と弥生の“るつぼ” — 秦野市平沢同明遺跡	22
VIII. 弥生時代中期中頃の暮らし — 本格的な稲作農耕集落	24
IX. 土偶に見る縄文と弥生の転機	28

例 言

- ◎ 本図録は、令和元年度 かながわの遺跡展『縄文と弥生—時代と文化の転機を生きた人々—』の展示図録です。
- ◎ 本展覧会は、神奈川県教育委員会（埋蔵文化財センター）・神奈川県立歴史博物館・綾瀬市教育委員会の共同主催によるものです。
- ◎ 展示会場と会期は、次のとおりです。
 - 【横浜会場】 神奈川県立歴史博物館
令和元年 11 月 27 日（水）～令和元年 12 月 22 日（日）
休館日は毎週月曜日
 - 【綾瀬会場】 綾瀬市役所 7F 市民展示ホール
令和 2 年 1 月 9 日（木）～令和 2 年 1 月 26 日（日）
休館日は 1 月 13 日（月）
- ◎ 本図録に掲載した出土品の所蔵・保管先については、県教育委員会所蔵のものは略しました。
- ◎ 本展の企画・図録の作成は、神奈川県立歴史博物館（担当 丹治雄一）、綾瀬市教育委員会（担当 伊東はるか）の協力を得て、神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課中村町駐在事務所〔神奈川県埋蔵文化財センター〕の小此木健が行いました。遺構名称の表記については、報告書等の記載に従っています。
- ◎ 表紙写真：（上段）秦野市菖蒲内開戸遺跡出土の浮線文土器
（下段）横浜市港北区新羽浅間神社遺跡出土の甕形土器

1. 縄文文化と弥生文化、それぞれの暮らし

縄文文化の暮らしとして、中央に広場を有した集落(=環状集落)で、土器を使用し、狩猟・採集・漁撈を生業の基盤とした生活が描かれます。一方、弥生文化の暮らしは、濠に囲われた集落(=環濠集落)で、水田稲作を中心とした農耕を行い、食料生産に重きを置いた生活を営む姿で語られます。

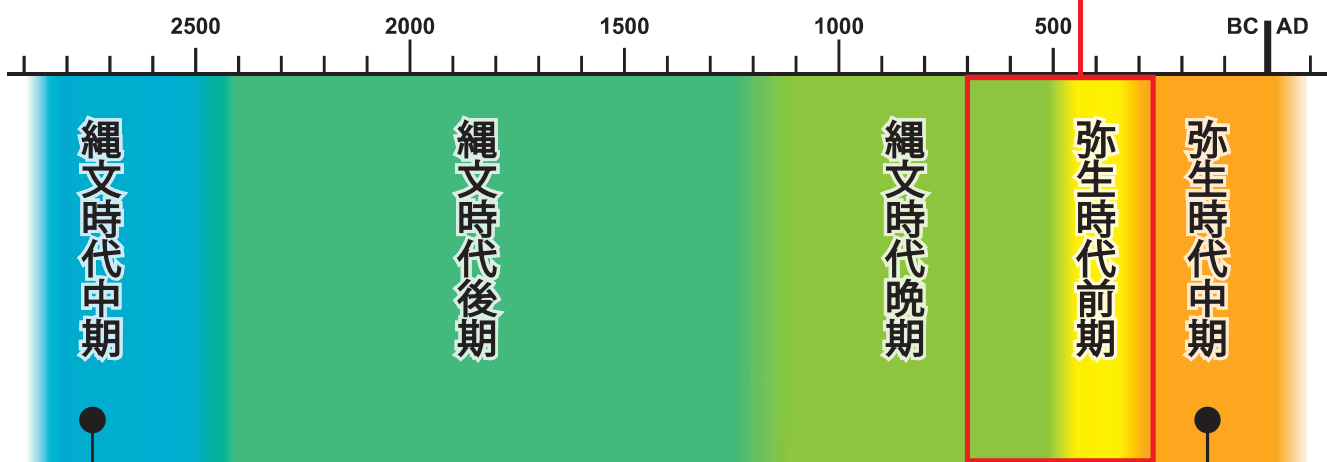
歴史を振り返ると、縄文時代から弥生時代へと確かに移行していきませんが、その過程の中で狩猟採集の生活から稲作農耕の生活へ、環状集落の暮らしから環濠集落の暮らしへとスムーズに移ったわけではないことが発掘調査の成果からわかってきました。発見された遺構や遺物から、当時を生きた人々がさまざまな変化に対応しながら社会を形成していた姿が浮かんできます。

本展示では、これまであまり注目されることがなかった縄文文化から弥生文化へと移り変わらんとする時期だけではなく、前後の時期との比較を通して、時代と文化の転機を生きた人々がどのように暮らしを営んでいたのか、その足跡を追うことにします。

※今回の展示では、縄文時代晩期後半から弥生時代前期後半を経て、弥生時代中期前半までの期間を「縄文」と「弥生」の転機として捉えることとします。

縄文と弥生の転機

1. 略年表



2. 縄文時代の環状集落 (神隠丸山遺跡; 横浜市都筑区)

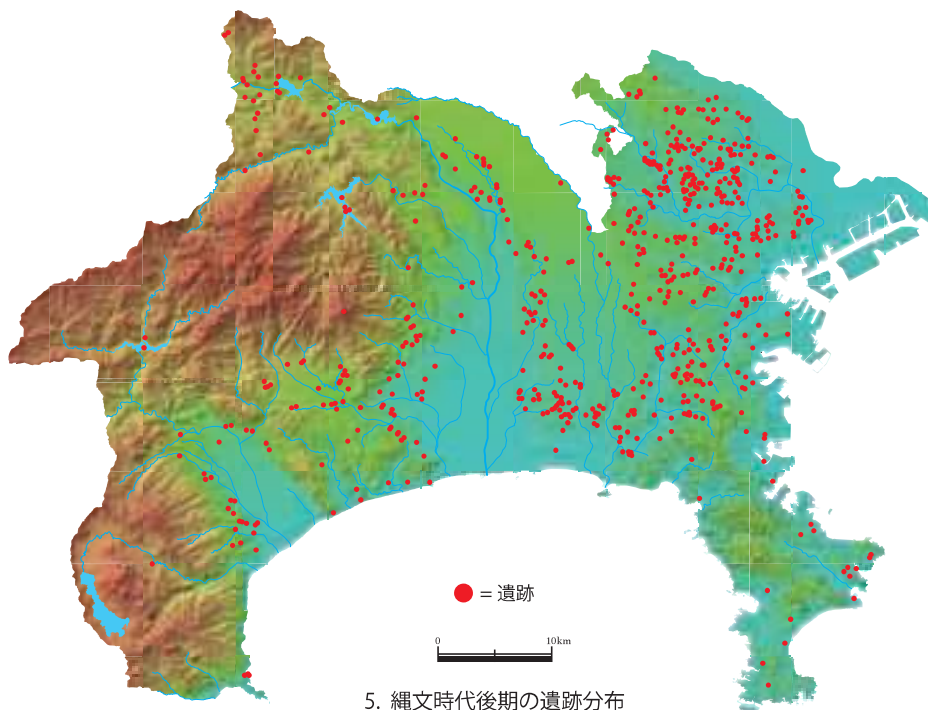
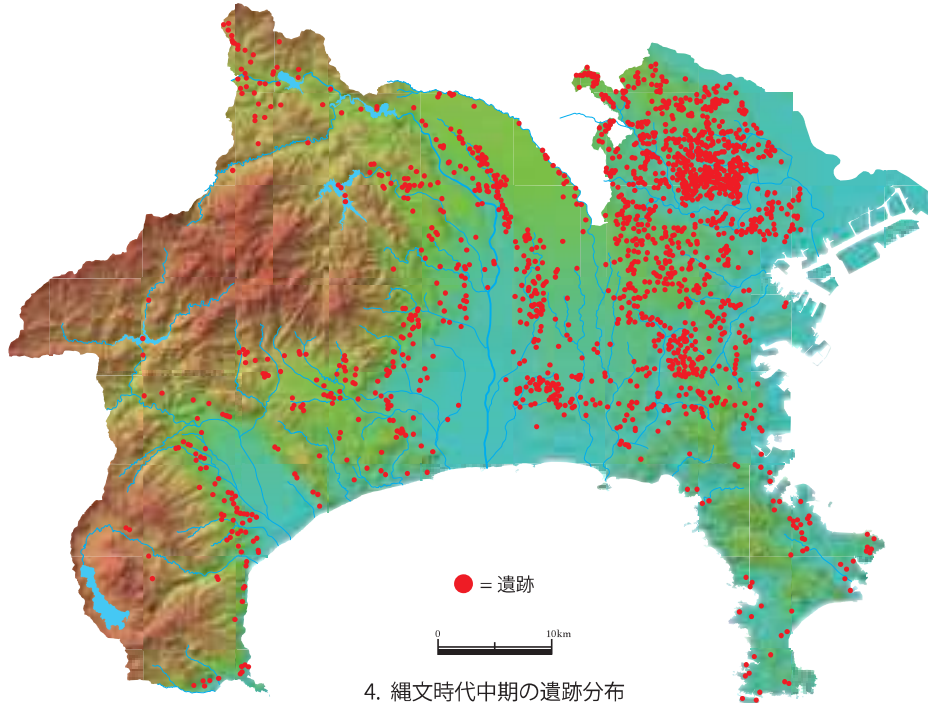


3. 弥生時代の環濠集落 (大塚遺跡; 横浜市都筑区)

II. 環状集落のその後 — 縄文時代後期の暮らし

環状集落という集落の形は縄文時代前期から現れ始め、中期には各地でさかんにつくられるようになります。関東地方や中部地方では規模の大きな環状集落が数多くみられ、縄文時代の遺跡数は中期にピークに達します。

ところが、縄文時代後期になると遺跡の数は減少へと転じます。関東地方や中部地方では顕著な傾向として確認され、神奈川県域でも遺跡の分布からその傾向は見てとれます。



遺跡数が減少する背景として、気候の冷涼化が考えられています。縄文時代前期から中期まで気候の温暖化に支えられた自然環境がはぐくむ植物質食料の高い生産力を基盤として大規模な環状集落が形成されました。しかし、中期末から気候が冷涼化することで植生に変化が生じ、それまで利用していた植物質食料が枯渇することで、大規模な集落を維持することが困難になったとするものです。

ところが、この考え方に対し気候の冷涼化に起因した居住形態や生業形態の変化を、新たな社会への動きとして捉える見方もあります。その一端を綾瀬市の上土棚南遺跡や宮久保遺跡で垣間見ることができます。

上土棚南遺跡は台地縁辺部に営まれた集落の姿を今に伝えてくれます。上土棚南の集落は、中期にみられた大規模な環状集落ではなく、小規模な集団が一定期間で居住の場を少しずつ移りながら形成された集落の姿を示します。

一方、上土棚遺跡から北西へ 4km ほど離れた宮久保遺跡は河床に面した低地に位置し、旧河道から多くの土器が出土しました。興味深いのは、住居などの居住施設が発見されていないにもかかわらず、土器とともにシカやイノシシなどの獣骨や、堅果類などの植物質食料が発見されている点です。

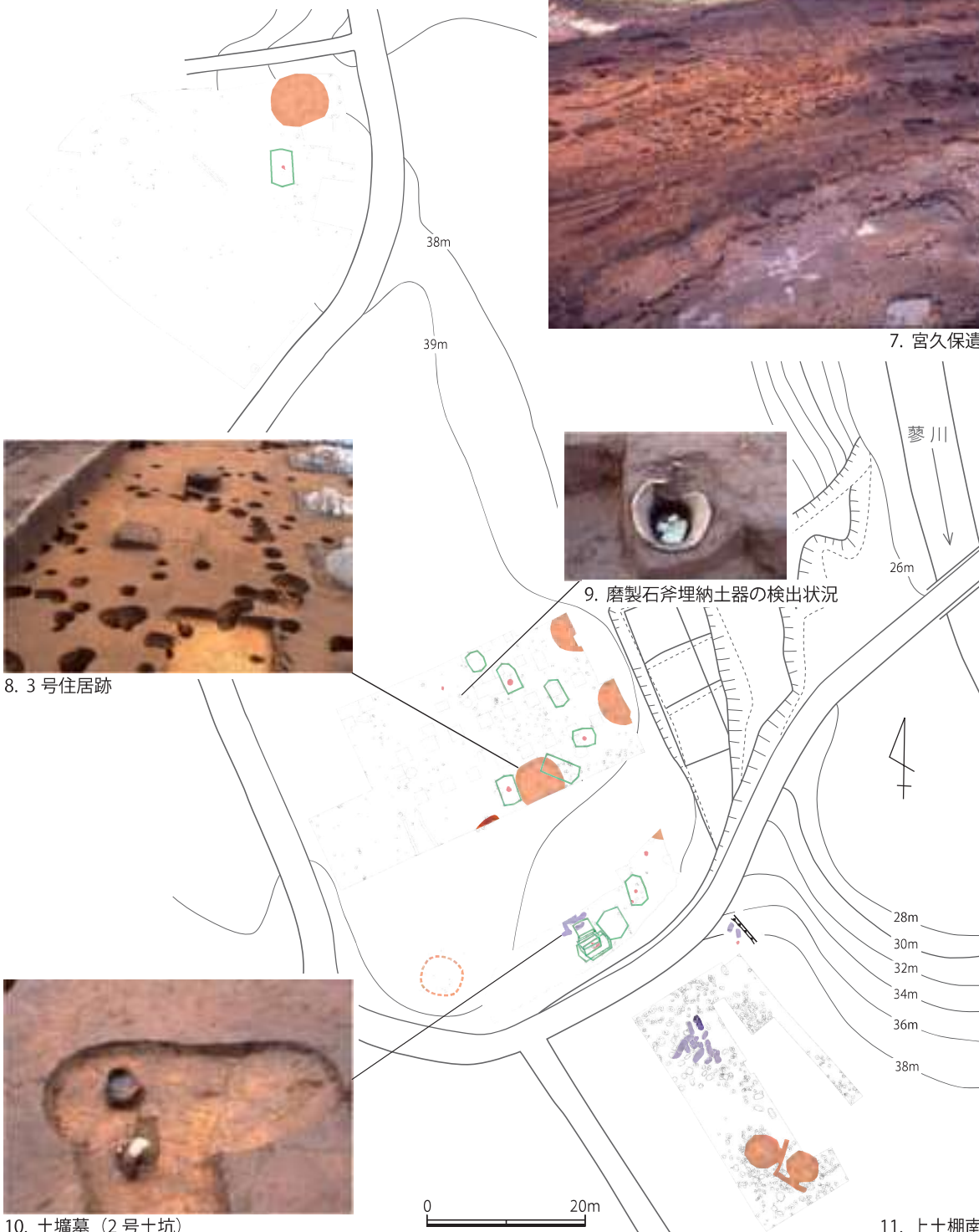
両遺跡の特徴から、気候の冷涼化を迎えた当時の人々は大きな集団で 1 つの場所に集まって暮らすというそれまでの生活スタイルを変化させ、小さな集団に分散して台地上に集落を構えながら、台地下に広がる低地で流水を利用した堅果類の処理などを行っていた姿が浮かび上がってきます。



6. 宮久保遺跡と上土棚南遺跡の位置



7. 宮久保遺跡旧河道の検出状況



8. 3号住居跡



9. 磨製石斧埋納土器の検出状況



10. 土墳墓 (2号土坑)

11. 上土棚南遺跡の遺構分布状況

■環境に適応する暮らし

宮久保遺跡では河道に接した低湿地で土器を利用した堅果類の処理を行っていたと推測されていますが、西富岡・向畑遺跡（伊勢原市）と真田・北金目遺跡群（平塚市）では土坑や杭列・礫敷きなどの施設を伴った、いわゆる「水場遺構」が発見されています。



真田・北金目遺跡群の水場遺構は、台地の谷戸を利用してつくられ、谷斜面に掘り込まれた土坑と、谷底に沿って形成された礫敷きから構成されます。

礫敷きは全長 70m あまりの規模で、谷戸の湧水を礫敷きの上流部で導水し、中流部や下流部にくぼみを設け、杭などを利用して水をせき止めていたと考えられています。

礫敷きからは多量のトチノキ種実とともにオニグルミ・クリ・カヤが出土していることから、水場遺構を手入れしながらせき止めた湧水で、堅果類の水さらしなどを継続的に行っていたと推測されています。

13. 真田・北金目遺跡群の水場遺構



12. 西富岡・向畑遺跡の水場遺構

時代区分	前期		縄文時代中期				縄文時代後期				縄文時代晩期			弥生時代
	後葉	前葉	中葉	後葉	初葉	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉		
(cal BP)			S-1期	S-2期	S-3a	S-3b期	S-4期		S-5期					
			ca.5300 ~4800	ca.4500 ~4400	ca.4200 ~3900	ca.4200 ~3900	ca.3800 ~3300		ca.3400 ~2800					
河道変遷	河道1												河道2	
遺構・遺物			1号水場遺構 1号クルミ塚 2号クルミ塚 (北東部集中)	2号クルミ塚 (南西部集中)	8号水場遺構	4号トチノキ塚 49号榊組製品 7号水場遺構	2, 3, 5号トチノキ塚 37号榊組製品 周辺埋填土 3号焼土pit23	1号トチノキ塚	クリ果実集中 有植物集中 4号水場遺構					
オニグルミ			●	●										
ヒメグルミ														
クリ			▲	▲				●		●				
クヌギ節														
コナラ			▲											
ナラガシワ			▲	▲										
アカガシ亜属						○								
トチノキ			▲	▲		●	●	●		▲				
ネギ属					○					○				
その他			エゴマ ヒョウタン ▲ササゲ属	▲ササゲ属			エゴマ ヤマアザミ ▲ササゲ属		ニフトコ ヤマアザミ ▲アサ				ニフトコ	

● 種実の集積など遺構レベルの利用痕跡
○ 遺物レベルでの利用痕跡
▲ 産状や組成から利用を推定したもの
— 河道内における出土量の比率の変化
..... 出土時期が絞れないもの

14. 下宅部遺跡における植物資源利用の時期別変遷

複数の水場遺構とともに多量の植物遺体がみつかった東京都東村山市下宅部遺跡での分析によると、縄文時代中期では主にクルミが利用されていたのに対し、後期になるとトチノキが顕著になり、さらにドングリ類やクリが加わり、複合的な種実を利用していたことがわかっています。

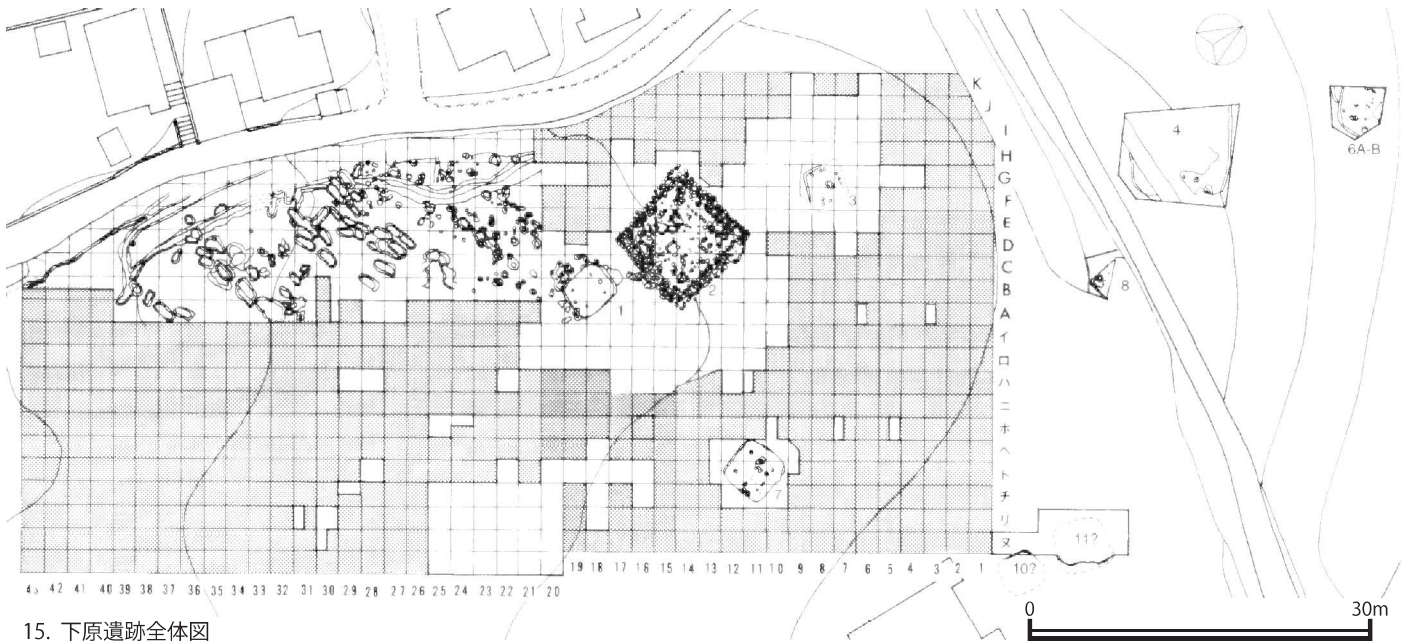
縄文時代後期になり、気候の寒冷化に伴う植生の変化により食料資源が枯渇したと考えられています。西富岡・向畑遺跡や真田・北金目遺跡群の事例などから、寒冷化という自然現象を巧みに利用して、多角的に植物資源を活用し、持ちうる知恵や技術をもって環境変動に適応したと評価できるかもしれません。

III. 縄文時代晩期の暮らし

縄文時代後期には遺跡数が中期から減少するものの、植物質食料の利用を多角化させ、変動する自然環境に適応した暮らしがうかがえましたが、晩期に至ると遺跡数はさらに減少し、県内では集落跡の発見例は限られたものになります。そして、集落の規模は後期の集落に比べ、縮小します。縄文時代後期後半の時期を前後して富士山や伊豆で連続的に火山噴火があったことが指摘されていることから、噴火活動による環境変動が暮らしに影響を与えたのかもしれませんが。

数少ない集落遺跡の中で、^{しもつばら}下原遺跡（川崎市高津区）は当時の暮らしの一端を今に伝えてくれます。下原遺跡では晩期の住居跡が複数発見されていますが、特に一辺が 9m に及ぶ大型の住居である第 2 号住居址は目立ちます。この住居跡には石囲炉が 2 つあり、その周囲に主柱穴が配置され、その外側に多くの支柱列が方形にめぐっています。支柱穴は 2～3 列並んでいることから、複数回住居がつくられたと考えられます。

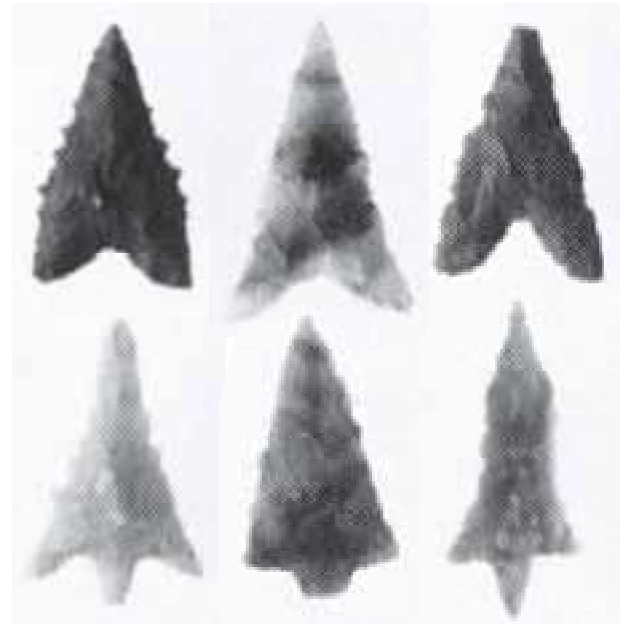
その規模から、第 2 号住居址は集落の中核的な存在であった可能性もあります。近くには^{ほったてばしらたてものあと}掘立柱建物跡や^{どこうぼく}土壌墓群が分布します。



15. 下原遺跡全体図



16. 第 2 号住居址



17. 第 2 号住居址出土の石鏃 川崎市教育委員会所蔵

住居跡からは多種多量の遺物が出土しています。そのうち、石器では^{せきぞく}石鏃が突出した割合を占めることが特徴的です。発掘調査ではシカやイノシシの骨が土壌化せずに「骨塚」のように遺存していた状況が確認されていることを考え合わせると、縄文時代晩期を生きる人々は狩猟にやや重きを置いた暮らしを営んでいたと考えられます。

IV. 縄文と弥生の転機 — 縄文時代晩期後半

縄文時代晩期後半は、1万年以上続いた縄文文化と次の弥生文化とをつなぐ時期になります。この時期には、東北地方南部から関東・中部・北陸地方に浮線文あるいは浮線網状文と呼ばれる文様をもつ土器の分布圏が広がります。

浮線文土器とは、器面を削り、抉り込んで浮き出させた細隆線で文様を施した土器をさします。その文様は平行線・菱形・三角形・工字状・網目状・匹字状・レンズ状など多岐にわたります。

浮線文土器の主な分布は、北に高度化した採集狩猟文化を象徴する亀ヶ岡式土器の分布域、西に弥生文化の成立に深くかかわる突帯文土器の分布域に挟まれた地域にあたり、関東・中部地方の弥生土器の成立に大きな影響を与えました。



18. 荒海貝塚（千葉県成田市）出土の浮線文土器
早稲田大学會津八一記念博物館所蔵

浮線文土器の主な分布域



19. 浮線文土器が出土した主な遺跡の分布

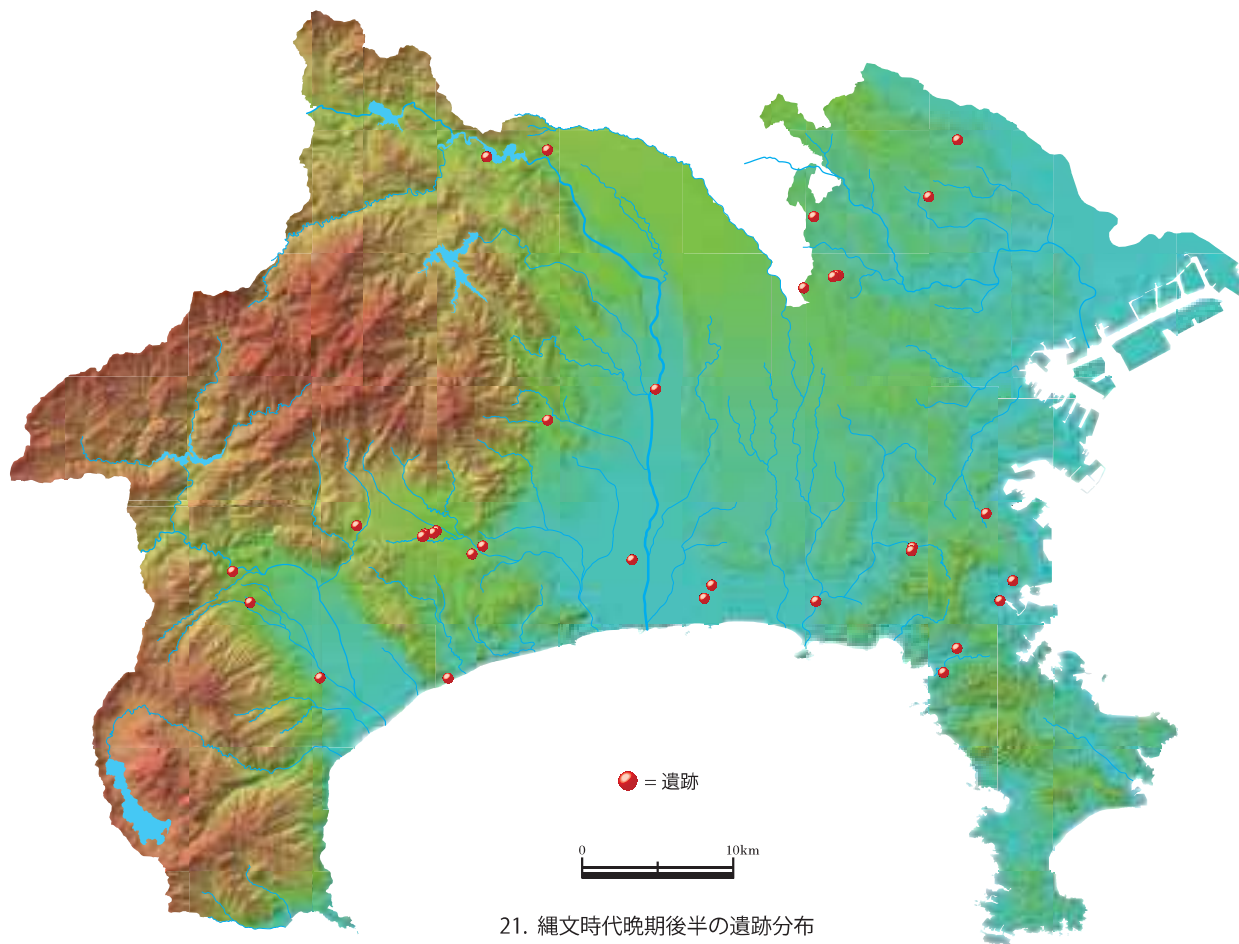


20. 氷遺跡（長野県小諸市）出土の浮線文土器
國學院大學栃木学園参考館所蔵

関東地方や中部地方に浮線文土器が広がる頃の神奈川県域は、縄文時代後期から減り続けてきた遺跡の数が激減し、ごく少数の分布を示すのみとなります。前章で取り上げた下原遺跡のような集落はみられなくなってしまいます。今のところ、県域では縄文時代晩期後半に位置づけられる明確な住居跡は発見されていません。

この時期の遺跡として確認されるのは、土中のまとまった範囲から土器片や石器などが出土する状況です。ほとんど遺構を伴わず、生活の痕跡が乏しいため、どのような暮らしをしていたのか不明な点が多くあります。

晩期後半は気候の寒冷化が最も進んだ時期に当たることがわかっていますが、自然環境の変化が暮らし方に影響を与えたのでしょうか。



22. 中里遺跡（秦野市）出土の浮線文土器



23. 菅蒲内開戸遺跡（秦野市）出土の浮線文土器

集落が形成されない状況は神奈川県域だけではなく、関東・中部地方に共通する現象です。広く見渡してみても住居跡の発見は数例にとどまります。また、発見された住居跡の大半は規模が小さく、掘り込みが浅いことに加え、長く継続して利用された痕跡がないことから、小規模な集団が短期間のうちに生活の場を移しながら暮らしていたと推測されています。



24. 在家遺跡（埼玉県上尾市）の第3号住居跡



25. ヤツノ上遺跡（茨城県牛久市）の第8号住居跡

移動を繰り返しながら生活をしてきた人たちは、土器とともに数種類の石器を携えていました。中部地方の事例では、数種類の石器のうち、狩猟具である石鏃が多くの割合を占める状況が確認されています。

神奈川県域では、杉田遺跡（横浜市磯子区）や西之原遺跡（横浜市緑区）で浮線文土器とともに石鏃が見つっています。前時期の下原遺跡で確認された狩猟の比重を拡大した生業を、縄文時代の終わりまで引き継いでいたと考えられます。



26. 西之原遺跡で採集された石鏃
横浜市歴史博物館所蔵

ただ、狩猟を中心とした暮らしではなかったと思われる自然遺物が、新潟県の遺跡から出土しています。御井戸遺跡(新潟市西蒲区。旧巻町)ではトチノキやクルミの集積が、青田遺跡(新発田市。旧加治川村)ではクリを主体としてトチノキ・オニグルミが多量に廃棄された状況が確認されており、クリやトチノキが主要な食料として利用されていたと考えられます。

神奈川県域では、この時期の堅果類は発見されていませんが、御井戸遺跡や青田遺跡の事例からは気候の寒冷化が厳しくなった中でも、縄文時代後期以来の多角的な植物質食料の利用を継続していた可能性があります。



27. 御井戸遺跡で見つかったクルミの集積



28. 御井戸遺跡で見つかったトチノキ果実の集積



29. 青田遺跡出土のクリ果皮

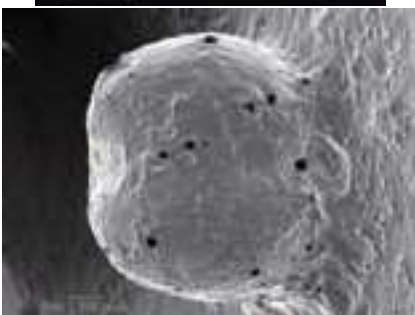
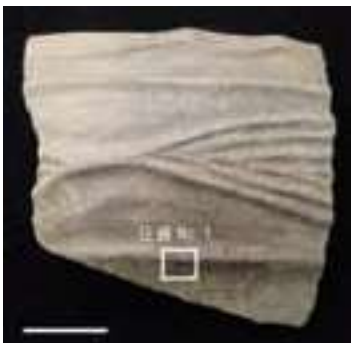


30. 青田遺跡で見つかったトチノキ果実が詰まった穴

photo by T.Ogawa

さらに、浮線文土器が広がる時期に新たに現れるのが雑穀です。雑穀とはイネ以外の穀物植物を指します。雑穀そのものは見つかってはいないものの、浮線文土器にその痕跡(=圧痕)が残されていました。分析により圧痕を残した雑穀はアワとキビであることが確認され、土器をつくる場面の近く、暮らしのすぐそばにアワやキビが存在していたことがわかりました。この結果を積極的にとらえた場合、アワやキビといった雑穀を暮らしに取り入れ、栽培を行っていた姿が浮かんできます。

縄文時代後期以降、遺跡数が激減する現象から、行き詰まりあるいは停滞と評価される縄文時代後・晩期社会ですが、これまでの経過を踏まえると、当時の人々は周囲の環境に柔軟に対応して生活を営んでいたと言えるかもしれません。



31. 川尻遺跡(相模原市緑区)のアワ圧痕
相模原市立博物館所蔵



32. 下大槻峯遺跡(秦野市)のアワ圧痕

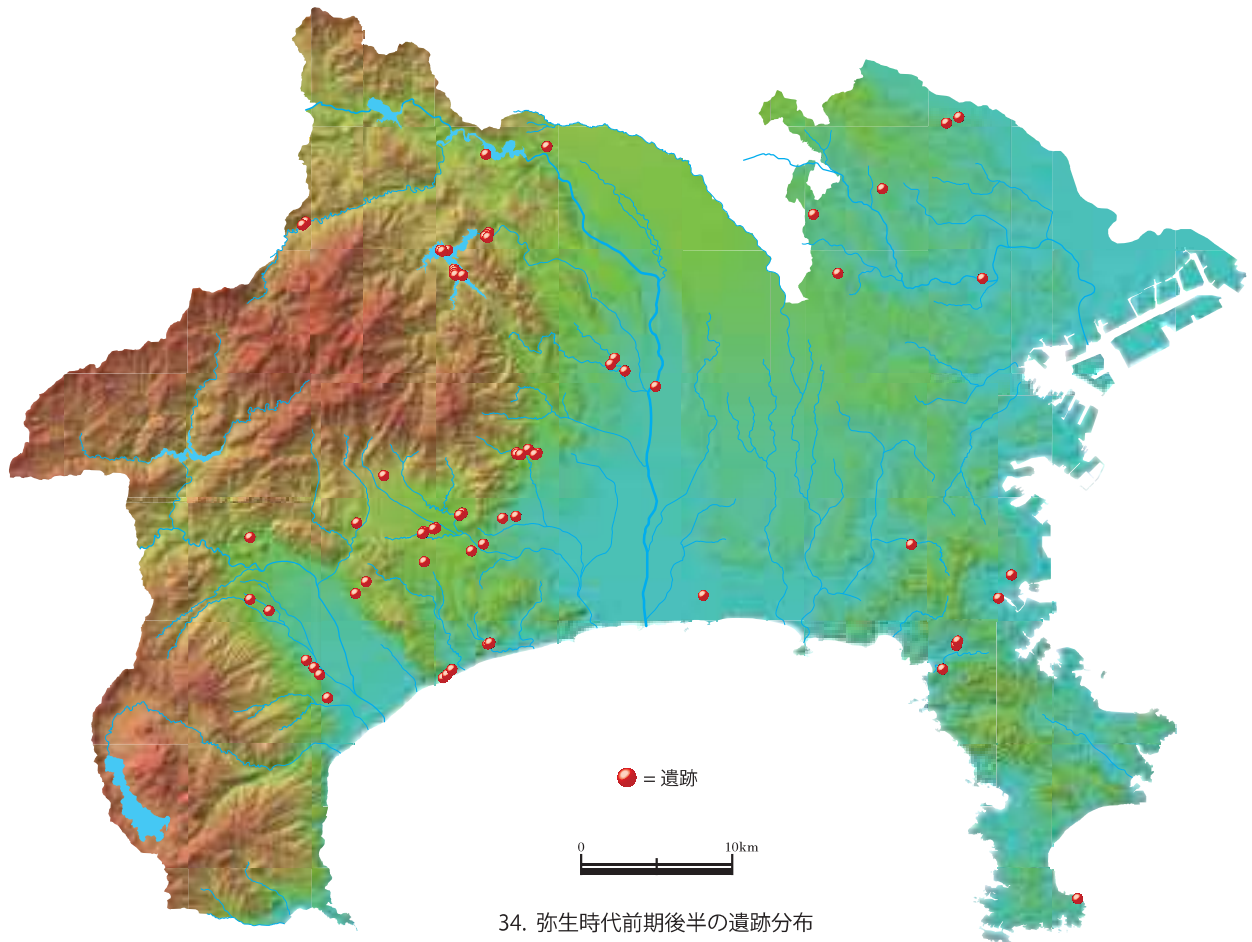


33. 中里遺跡(秦野市)のキビ圧痕

V. 縄文と弥生の転機 — 弥生時代前期後半

縄文時代晩期後半を経て、弥生時代へと移り変わることとなります。日本列島各地の土器編年との対比から、神奈川県域のその時期は弥生時代前期後半に相当します。

弥生時代前期後半をむかえると、亀ヶ岡式土器の流れを汲む変形工字文と呼ばれる文様で飾られる土器や、東海地方に由来する条痕文と呼ばれる器面を二枚貝腹縁や植物の茎を束ねた原体で施文された土器、北部九州を起源地として東海地方の影響を受けて生成した遠賀川系土器など、さまざまな様相がみられるようになります。



34. 弥生時代前期後半の遺跡分布

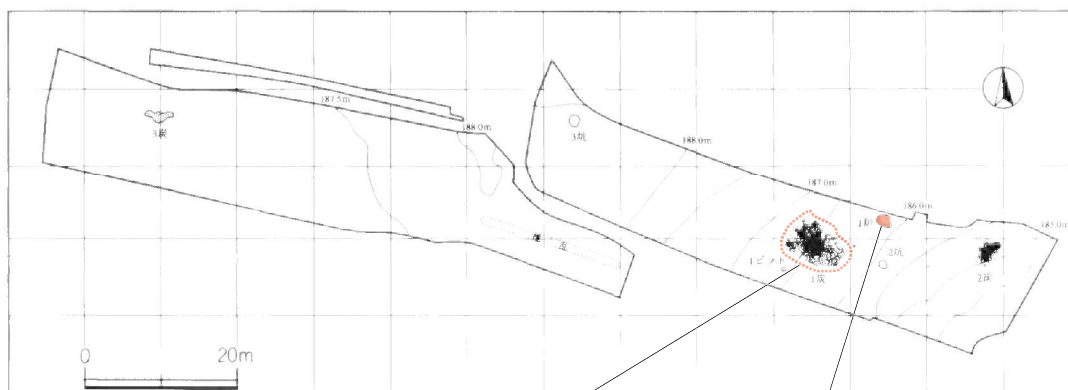


36. 菖蒲内開戸遺跡（秦野市）の条痕文土器

35. 中里遺跡（秦野市）の条痕文土器

弥生時代前期後半の遺跡数は、縄文時代晩期後半に比べ、増加傾向を示すようになります。前時期に引き続き、今のところ明確な住居跡は確認されていないものの、^{やがしら}矢頭遺跡（大井町）・^{きたばら}北原 No.9 遺跡（清川村）の事例にみられる^{あしたん}炉跡や炭化物の集中など、火を焚いた生活の痕跡が把握できるようになります。

ただし、ある一時期で使用を終えていることから、小規模な集団で短期間のうち移動を繰り返しながら生活していたと考えられます。



37. 矢頭遺跡遺構分布図



38. 1号炭化物集中



39. 1号炉跡



40. 北原 No.9 遺跡で見つかった焼土址の分布



41. 6号焼土址



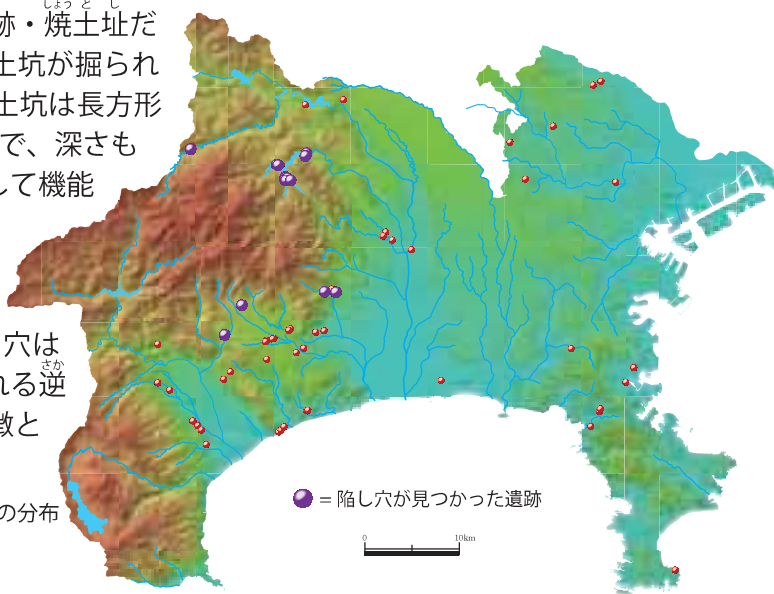
42. 1～5号焼土址

■継承される狩りの技

この時期に生きた人々の活動の痕跡は、炉跡・焼土址^{しょうどし}だけではありません。丹沢山地周辺では多くの土坑が掘られていることが発掘調査で確認されています。土坑は長方形を呈し、長軸 1.5m～2.0m を測るものが大半で、深さも 2m を超えるものがあることから、^{おと}陥し^{あな}穴として機能していたと推測されます。

陥し穴は、古くは旧石器時代の遺跡からも見つかっていますが、縄文時代を通して主にみられる遺構です。ただし、この時期の陥し穴はいずれも、縄文時代の陥し穴にたびたびみられる^{さか}逆^{もぎ}茂木などの付帯施設を有していないことが特徴といえます。

43. 弥生時代前期後半の陥し穴が見つかった遺跡の分布



45. 宮ヶ瀬遺跡群宮ヶ瀬地区（清川村）の遺構分布図



44. 上村遺跡で見つかった陥し穴（Y1・9号土坑）

関東・中部地方を見渡しても、この時期の陥し穴がまとまって掘られている遺跡はほとんど見当たりません。丹沢山地周辺では陥し穴を利用した狩猟が活発に行われていたことがうかがわれます。

興味深いのが、手間をかけて多くの陥し穴で深く掘り込むことはしながら、住まいの場として竪穴住居をつくることはしなかったという対照的な在り方です。選択的な労力の投下に、当時の人々の生活戦略の一端が示されているのかもしれない。



46. 平原向原遺跡・平原屈中原遺跡で見つかった陥し穴の分布



47. 平原向原遺跡で見つかった陥し穴 (上;J3号土坑・下;J42号土坑)

では、深く掘り込まれた陥し穴はどの動物を対象としたものだったのでしょうか。

手がかりとなる自然遺物が、^{まくらやま}桜山うつき野遺跡 (逗子市) より出土しています。本遺跡は低地に位置し、^{でいたんそう}泥炭層に覆われていたため、台地上の遺跡では残らない自然遺物が多く遺存しており、それらの中に^{じゆうこつ}獣骨が含まれていました。鑑定の結果、獣骨の大半はシカとイノシシであることがわかりました。

桜山うつき野遺跡の事例を参照すると、陥し穴はシカやイノシシの捕獲を目的に、罠として利用されていたと考えられます。



48. 桜山うつき野遺跡の獣骨出土状況



49. 桜山うつき野遺跡出土の獣骨